

(別紙2)

審査の結果の要旨

氏名 小川 隆

小川隆氏の「語録の思想史 —— 中國禪宗文獻の研究 ——」は、原典の精読によって、唐宋代の禪宗の思想史および 20 世紀におけるその再解釈の様相を考察した研究である。一般に難解なるもの、さらには不可解なるものの代名詞のごとくに言われる禪の語録だが、本論文は、時代ごとに文献を限定し、それを唐宋代の語義・語法をふまえて語学的に解説しつつ、関連の問答を相関的・連鎖的に解釈するという独自の手法によって、その学問的な解説に成功を収めている。

論文はまず「序論」で禪宗語録の解説方法について論ずる。唐代の禪においては禪宗内の共通の問題意識のもとで問答どうしが互いに関連しあっており、その脈絡を復原しながら複数の問答を相関的に読むことで、一見不可解な問答も、実は有意味なものとして解説可能であることが実証される。しかし、宋代になると同じ問答が非脈絡的・脱論理的なものとして扱われるようになり、そうした考えが現代における「禪」言説の暗黙の前提になってゆく、という本論文の見通しがあわせてここに提示される。

つづく本論は全三章より成る。第一章では十世紀半ばに編纂された『祖堂集』を主な材料としつつ唐代の禪宗について論ずる。唐代禪の第一の主流である馬祖系の禪とそれに対抗して後起した第二の主流である石頭系の禪、それぞれの特徴が多く問答の解説を通して分析される。従来は漠然と師承系譜上の分派と捉えられていた両系統だが、その分岐点が、実は、現実態の自己を即自的に肯定する馬祖系に対し、それとは別次元の「本来」の自己を探究しようとする石頭系、という思想上の対立にあったことがここで解明されている。この指摘は、本論文の優れた創見のひとつである。

第二章では十二世紀初頭に編纂された『碧巖録』を主な材料として宋代禪の思想が論ぜられる。『碧巖録』に「公案」として採られた問答について、唐代禪における原意とその『碧巖録』のなかでの解釈を対比的に検討するというのが、この章の基本的手法である。これによって、唐代禪の文脈のなかでは有意味であった問答が、宋代禪において、本来の文脈から切断された無機質な言葉の断片として扱われるようになり、それがやがて大慧宗杲の「看話禪」に結実するという転換の過程が明確にされる。本章は、その転換が、ありのままの自己をよしとする唐代禪（とくに馬祖系の禪）への反措定という意味をもってしたこと、その対立が止揚されて「肯定→否定→絶対肯定」という宋代禪に特徴的な円環の論理に集約されていったことなどを、多くの実例によって説得的に論じている。

第三章では、20 世紀の「禪」言説に大きな影響力をもった胡適と鈴木大拙の禪研究の検証によって、今日における宋代的な禪理解の枠組みが再考される。

以上、本論文は、禪の語録に言葉で表現されたかぎりのものを、どこまでも学問的に厳密に読み解き、作品世界の内面に沈潜するという姿勢で貫かれている。本論文が禪の語録に対して達成した解説の精度とその思想的分析の深度は従来の水準をはるかに超えるものであり、禪宗史研究に対してその貢献はきわめて大きい。禪の語録の思想を中国の思想史・文化史のうえに位置づけるという考察は、今後の課題として残されているが、その成果の大きさにかんがみ、審査委員会は、本論文が博士（文学）の学位を授与するのに充分ふさわしいものと判断する。